室蘭
色・形・記憶の不思議

巖谷　國士 Iwaya　Kunio

1943年東京生まれ。東京大学出身。仏文学者・評論家・作家・写真家・明治学院大学名誉教授。シュルレアリスムの研究と実践を軸に、芸術・文化の広い領域にわたって執筆活動を展開。講演や展覧会監修、内外の紀行でも知られ、北海道との縁も深い。著書に『シュルレアリスムとは何か』ほか多数、近著に『澁澤龍彦論コレクション』全５巻、『旅と芸術　発見・驚異・夢想』。

私の見るところ、室蘭は北海道でも指おりの「不思議な町」である。

以前に地球岬などを「観光」したかぎりではなかったことだが、先日あらためて２日間を市内ですごしたとき、行く先々で驚きに出会った。ちなみに「不思議な」というのは私の特殊用語で、フランス語のメルヴェイユー、つまり「驚異の」とも「すばらしい」とも訳せる言葉である。

特徴のある建物や団地の多い町、鮮明な色の目立つ町、鉄と重工業と石炭輸送の町、港湾と鉄道駅の町、坂道と階段と窪地の町、海と風と断崖の町、文学とアートと漫画の町、人口減少とデカダンスの町、歴史の記憶とノスタルジアの町……等々、さまざまな要素が重なって、この不思議な町・室蘭は、大海に突きでた鉤（かぎ）形の半島という稀な地形のとおりに、一個の独立した小さな「くに」の印象をよびおこす。

そんな室蘭への再訪を思い立ったのは、ひとつにはそこで育った作家にしてアーティスト、篠原勝之の自伝的連作小説『骨風』を読んで、心を打たれたからである。泉鏡花賞を得たこの小説は山崎哲によって演劇化されもしたが、私はその舞台も観て、また別種の感慨に誘われた。

そこには少年期の思い出も語られている。とくに両親との関係が重要なテーマだが、室蘭の町の描写はほとんどない。かえってそのために、著者の記憶の底にあるだろう故郷の空間と風土について、もっと知りたいという気持が湧いてきた。

篠原勝之は芸術家ならぬ「ゲージツ家」を自称し、TVにも出ていたあの「クマさん」である。同世代の私には共通の友人が多く、同席する機会もよくあるのだが、なぜかまだ話をしたことがない。それでもそのゲージツ作品には早くから注目していた。なかでも鉄のオブジェはすばらしく、鉄の町に育ったことへの連想がはたらく。

実際、室蘭にもモニュメントの大作があると聞いていたので、いちど見ておきたいと思ったのである。

自伝的小説『骨風』でも、鉄のオブジェの制作過程が語られている。そればかりか、文体そのものに鉄に似たところがある。鉄の硬さ・鋭さや熱さ・冷たさ、音や味、匂いや肌ざわりまで感じられる。そういう魅力的な作品である。

東室蘭駅西口、夕刻に正面を見あげる。巨大な赤い額縁のなかのガラス窓を通して、陸橋を兼ねるホールの上部が眺められ、一種の現代アートを思わせる。　撮影：筆者

もっともそれが本題ではないので、ここでは室蘭そのものを体験することに集中しよう。今回は東室蘭駅の西口に宿をとり、まず近辺を歩いてみることにした。

東室蘭駅から東町の団地へ

東室蘭は絵鞆半島の付け根の内側にある駅で、半島全域を占める本来の室蘭から見ると新開地にあたる立地だが、札幌・函館間の本線はこの駅にしか停車せず、奥の室蘭駅まで行くには支線に乗りかえなければならない。だからここが市の玄関口である。

まず驚いたのはその駅の建物だった。といっても駅舎ではなく、線路をまたぐ陸橋の内部が立派なホールになっている構造だ。中空のホールは広く長く、両側はほぼ全面ガラス張りで、下にひろがる線路の列を見おろせる。端まで行くと長いエスカレーターがあって、正面の大窓から町を眺めながら地上へと降りる。

外に出て見あげる駅の正面も驚きだった。巨大かつ真っ赤な箱、といったらよいだろうか。いや、大窓の面積がすこぶる広いので、巨大かつ真っ赤な額縁といいかえるべきかもしれない。ほとんど現代アートを思わせる単純明快な鉄の構造物。室蘭人でなければこれが駅だとわかるまい。

だが真っ赤な額縁の下部には白と緑の文字で、「わたれる／JR東室蘭駅西口」と明記されている。駅がすなわち陸橋であり、東口まで「渡って行ける」ということだ。

ホテルに荷を置いて東口をめざした。エスカレーターを昇って長いホールを直進し、東口エスカレーターを降りてまた見あげると、ここにもそっくり同じ巨大で真っ赤な額縁が屹立している。なぜか満足した。

駅前は人通りが少なくて建物もまばらだが、南へ歩くうちに、まばらな建物の形や色に惹かれはじめた。向いの美容室にも赤い額縁がある。駅側では緑色の平たい箱のような建物がひとり幅をきかせているが、なんとパチンコ屋である。左に紺色の四角い大衆酒場。さらに行くと右に消防署があらわれ、これはやや凝ったモダン建築だが、車庫まわりが赤いし、上部の二つの大窓にも赤い額縁がある。

陸橋をくぐったところから、知る人ぞ知る東町の団地ゾーンがはじまった。まず目の前に断崖のごとくそそりたったのは雄大な高層ビルで、並木ごしに見あげるその正面は、下から赤茶・薄茶・ベージュの三色に塗りわけられている。三色アイスクリームに喩えればチョコレート・ミルクティー・ヴァニラのトリコロールで、横長の窓の整然とならぶ外観はすっきりしている。

だが人の住んでいる気配はしない。ふと連想したのはある種の社会主義建築、たとえば旧・東独ケムニッツの労働者団地だった。ただし向いに銭湯「ゆ～らんせん」があったりするところは違うけれども。

その南側にもよく似た高層アパートがいくつか聳えていて、ここは比較的新しい「東町弥生団地」だとわかる。だがさらに南へ進むと、形も色もとりどりの古ぼけた集合住宅がいくつかあらわれる。これらがいかにも趣ぶかかった。

なかでも東のL字プランのアパートはすばらしい。白い壁はところどころ剥げおち、裂け目を生じ、入口の庇は崩れかけ、窓のいくつかは割れたり板を張られたりしていて、一部は廃墟さながらである。

ニューヨークの寂れた地区とか、現代アートのインスタレーションとかのような味わいがある。といって暗いモノトーンではなく、二階へ直行する階段と陸橋は赤いし、ドアは青く、手摺は黄や緑だった。

現代都市に特有の廃れた美を現出しているけしきだが、すべてが廃屋というわけではない。ランドセルの少年が笑顔で挨拶してからドアをあけて入ってゆく。

そういえばそばに幼稚園もあって、園庭に点在する遊具が赤・青・黄。オレンジ色の鼻と頬をしたアンパンマン（顔だけ）もいる。入口につどう園児と母親も団地の住民だろう。

室蘭は工場地帯らしく集合住宅の多い都市だけれ

東町弥生団地の高層アパート、北側。14階建の雄大な建物で、茶系の濃淡三色に塗りわけられている。南側にも９階建のアパートが５棟あり、特異な景観ゾーンをかたちづくる。東町にはほかにも、新旧さまざまな団地がひろがっている。　撮影：筆者

篠原勝之制作の巨大な鉄のモニュメント「FURAI」（風来）。1993年にNHK室蘭の前庭に設置された。高さ20m弱。本体は赤で、ジャイロスコープは外側から緑・黄・青・白・赤、３本の脚は青・黄・緑、側面の８本の突起は青、頂上の風見の矢は青・黄・赤で、鮮やかな原色がまばゆい。　撮影：筆者

ど、とくにこの東町には集中していて、弥生・たいわ・汐見・末広の各団地が隣りあい、どこも特徴的な形と色をしている。戦後の各時期の流行を反映しながら、西洋風のセンスも加わってもいる。色は茶の濃淡が主流のようだが、斬新な青と白の横縞もある。こんな景観は北海道でもめずらしいだろう。

さらに歩くにつれ、周辺の店や公共建築にも大胆な色彩のものを見た。全面オレンジ色のショッピングセンターや、ピンクと青と灰色を不定形に塗りわけた駐車場ビル。上部が赤で下部が青・黄・赤のゲーム施設や、正面がピンクで側面が水色の生花店、等々。

東町には電話局の赤い鉄塔も聳えていて、下のビルは茶色だが、そのなかに社員がいるようには見えない。ほかの建物もだいたいそうで、人の気配のないことが多い。月曜の午後なのにどうしたのだろう。その点も不思議だった。

ともあれ、室蘭の初日は大満足である。夕食は西口のなにげない居酒屋を選び、カウンターに席をとって土地の料理を注文することにした。

居酒屋での対話

まず室蘭やきとり。北海道の多くの地方では「やきとり」が焼鳥とは限らず、竹串に刺して焼いたものの総称だが、室蘭でも「豚のやきとり」が名物である。特製蟹焼売（かにしゅうまい）はなんと肉マンほどの大きさで、１人１個、アルコールランプ上の蒸籠（せいろ）で供される。野菜は山芋とトマトと胡瓜（きゅうり）の三色。どれもしみじみとする味だ。

ひとり旅の私の前には中年のマダムが来てくれたので、ざっと次のような話をした。

「東京からって、室蘭は見るところが少ないでしょう。地味な町だからねー。」

「とんでもない。東町あたりを見たけど、すごい団地や原色の建物があって、むしろ派手ですよ。」

「えっ、そうですか。他所（よそ）と違いますか。」

「違いますよ。看板なんかの派手な町は多いけど、建物が色とりどりというのはめずらしい。それが空き家みたいになっていて。」

「人口が減ってますから。昔の半分に減って、いまは８万くらい。新聞に毎日の人口が載ってるんですよ（笑）。」

「人口減少日本一。それだけでも立派な個性じゃないですか。」

「立派かねー。」

「人が少なくて広々している。駅だってあの派手な真っ赤が遠くから見える。」

「他所と違いますか？だったら室蘭駅も丸い妙な形だから、気に入ると思いますよ。行きました？」

「いや、支線がなぜか不通になって、今日は行かなかった。かわりに東室蘭をゆっくり歩けてよかった。」

「明日はどこへ？地球岬や白鳥大橋の観光ですか？」

「それもあるけど、室蘭といえばあのゲージツ家、篠原勝之は知ってるでしょ？」

「クマさんね！テレビで見てましたよ。こちらで美術の先生をしていたって。」

「そのクマさんのつくった鉄の彫刻があるというんで、ぜひ見たいと思ってね。」

「あれ、NHKの前にありますけど、室蘭の人はあんまりねー（笑）。」

有名人のクマさんには親近感もあるようだ。来店したことはないが、昔の仲間が来て、噂話が出たりもするらしい。

そういえば店内には有名人の色紙があるが、サイン入りのポスターが気になった。少女マンガ風の絵柄と「女はゆっくり強くなる。」という惹句を見て、やはり室蘭出身の有名漫画家のことを聴きたくなる。

「曽根富美子も知ってるでしょ？昔の室蘭を舞台にした『親なるもの断崖』はすさまじい名作です。」

「知ってますけど、あの話は怖くてねー。最初しか読まなかったんですよ。」

「幕西（まくにし）坂にあった売春地区の話。戦中まで武器生産なんかで栄えていた室蘭の歴史がよくわかる。じつは明日、もうひとつ見に行きたいのはその幕西です。」

「売春禁止ができて幕西もすっかり変ったんですよ。いまは静かな住宅地です。見に行く人は物好きだねー（笑）。」

と、こんなふうにして東室蘭の一日が終り、翌日は

「お詫びと訂正」
弊誌2018年10月号に掲載された「素晴らしい北海道第４回　室蘭　色・形・記憶の不思議」の記述について、文中で名作として賞賛されている漫画作品『親なるもの 断崖』の著者・曽根富美子様より、以下のようなご指摘がありましたので、訂正させていただきます。
1　曽根富美子氏を「室蘭出身」としていますが、正しくは北海道天塩郡のお生まれであること。
2　ポロ・チケウ（地球岬の語源）を「親なるもの 断崖」を意味するアイヌ語としていますが、正しくは「大きい断崖」の意味であり、「親なるもの 断崖」は曽根氏の創作名であること。
これらについては現地での調査や公式ホームページにもとづいて記述されているものですが、弊誌編集上、詳細の確認を怠ったためにこのような表現になったことを、曽根富美子様、および読者の皆様にお詫び申し上げます。

朝から支線で半島に入ることになった。

電車はまず「新日鐵住金」の拠点である輪西駅にとまり、ついで室蘭港に近い御崎駅、さらに「日本製鋼所」の拠点である母恋駅を経て、終点の室蘭駅に到着する。

巨大な円筒形で正面がガラス張りの新しい室蘭駅はなるほど妙な建物だが、あの四角い真っ赤な東室蘭駅を見なれた目にはさほど不思議とは思われない。

それから１日かけて半島をめぐり、絵鞆岬や測量山から、ハルカラモイや地球岬（ポロ・チケウ=「親なるもの断崖」を意味するアイヌ語）まで、旧・絵鞆小学校の不思議な円形校舎や旧・室蘭駅舎の観光協会から、旧・ビアハウスの「港の文学館」（篠原勝之や曽根富美子の資料展示コーナーもあるよいところだ）まで、見られるかぎりを見て歩いたものだが、あとはとくに２つのポイントに話をしぼろう。

いうまでもなく、篠原勝之のモニュメント「FURAI」と、曽根富美子の長篇漫画の舞台・幕西の坂とである。

「風来」と幕西坂

駅から遠くないNHK室蘭は平凡なビルだが、前庭に立つオブジェ「FURAI」は非凡そのものである。高さ20メートル弱、巨大でへんてこで力強く、「天下のNHK」の前で同調も忖度もせず、勝手に堂々と、飄々と、三本の脚を踏んばって聳えている。

「FURAI」はすなわち「風来」であり、室蘭に吹き来たる風をイメージさせる。現に三角錐に近い本体には風でまわるジャイロスコープがついているし、頂上には風見の矢が長く伸びている。

人体か顔の感じもあって、どこからともなくあらわれた図体のでかい「風来坊」に見えなくもない。風来坊というとゲージツ家自身の似姿かもしれない。風のごとく来たりて去る風来坊。

だがなによりも目を奪うのは色彩だろう。本体の単純明快な赤と、付属部分の緑・青・黄。すでに見なれている原色だと気づく。東室蘭だけでなく半島内でも、とくに港でもこの四色をよく見かけた。

こういう色づかいはミロやカルダーや岡本太郎にもあるけれど、材質感が違う。三本脚の下部に剥きだしになっているボルトの列など、鉄の構造物であることがあからさまだ。

どうやら「FURAI」が室蘭という鉄と風と色の町を自覚していることは確かなようで、見ようによってはこれこそ、オブジェ化された室蘭である。

そもそも明治以来の国策鉄工業都市として厖大な労働力を必要としていた室蘭は、各地から風来坊の集まってくる町だった。そこには軍事国家と資本主義社会の歪みが集約されてもいたことも思いおこされる。

他方、駅にも港にも近い坂の町・幕西が、国家公認の売春地区として怪しく栄え、売られ流されて「風来」する女性たちの悲惨な生活の場となり、工場に「風来」する労働者たちの慰安に奉仕していたことも、曽根富美子の名作とともに思いうかぶ。

私はその幕西にも行った。往時の色街の面影はなく、いまは寂しげな住宅地である。ただ坂道そのものはおそらく元のままで、あちこちに路地や石段や窪地があり、その奥には記憶の幻がうずくまっている。

夏の午後、風がこころよい。人通りはほぼ皆無である。だが登り坂の大きく曲る角にピンク色の二階家があらわれ、手前の電柱に白髪の女性が寄りかかっているのを見た。望遠で撮った写真が手もとにある。

その老女の記憶をなにがしか聴きだせるのではないかと思い、近づいて行ったところ、その姿はふと電柱を離れ、路地のどこかへ消えてしまった。

室蘭中心部の幕西坂は、かつて公認の売春地区だったところ。敗戦後の売春禁止法によって女郎屋はすべて廃止され、いまは静かな住宅地になっている。坂の中途の電柱に、年老いた女性が寄りかかっていた。夏の午後の一刻。　撮影：筆者